

19 世紀末の台湾においては、先住民はそれぞれの部族語を話し、明清二王朝の時代に大陸から移民してきた漢族は大別して閩南語と客家（はっか）語を話していた。しかも閩南語も客家語もさらに下位の方言に枝分かれしていた。19 世紀末の台湾人の識字率は 10 パーセント程度と推定され、口語文はいまだ存在せず、古典中国語が読み書きされていた。その言語状況は「国語」制定以前の明治初期の日本、あるいは標準語制定以前の 18 世紀から 19 世紀半ばのヨーロッパ諸国とそれほど異ならぬ状況であったことが推測できよう。ただし大きく異なるのは台湾の俗語がその後「国語」化されなかった点である。

台湾に近代国家の国語制度を持ち込んだのは、1895 年から五一年間にわたり宗主国であった日本である。初期には抵抗もあったものの、1943 年末には日本語理解者は島民の 60 % 近くに達した。台湾島民は全島規模の言語的同化を通じて日本人化されていったが、それと同時に全島共通の「国語」は諸方言と血縁・地縁で構成されていた各種の小型共同体意識を越えた、台湾大の共同体意識を形成したのである。それは台湾ナショナリズムの萌芽であったといえよう。

1930 年代に入ると日本語読書市場が形成され始め、台湾人による日本語文学も本格化し日本語作家の作品が続々と内地の総合誌、文芸誌の誌面を飾って高い評価を受け、台湾島内でも文芸誌が盛んに刊行され始めている。楊逵（ヤン・クイ、ようき、1905 ~ 85）はそのような作家群の中でも最初期に頭角を現し、日本プロレタリア文学と連携しながら台湾文壇のリーダーとして活躍した。

本論文はこの楊逵に焦点を絞りつつ各種文献を渉猟するいっぽう、楊逵およびその文学形成に大きな影響を与えた日本人の遺族・関係者に膨大なインタビュー、アンケート調査を行って、全九章により日本統治下台湾における楊逵文学の形成過程解明を試みたものである。第一章では日本・台湾・中国における楊逵研究史を概観し、第二章では楊逵の生涯を九期に区分して略年譜を作成した。第三章では楊逵の公学校（台湾人向け小学校）時代の恩師沼川定雄（1898-1994）の生涯と彼が楊逵文学に及ぼした影響を考察し、第四章では楊逵の出世作「新聞配達夫」のナウカ社『文學評論』賞受賞（1934）の経緯と日本中央文壇、特にプロレタリア作家たちの「新聞配達夫」に対する評価を検討した。第五章では台湾で楊逵が主宰した文芸誌『臺灣新文學』（1935 ~ 37）の意義と廃刊の経緯、およびその直後に再遊した東京での活動を明らかにし、第六章では 30 年代左翼文芸運動期の楊逵の芸術観や台湾文学観を探っている。第七章では、プロレタリア文学運動の衰退、日中戦争の勃発、楊逵夫妻の病気などのため挫折していく楊逵の文学運動を展望し、第八章ではその楊逵の窮地を救い、のちに「赤い警官」として自殺する日本人警察官入田春彦の経歴とその文芸活動、楊逵との交友の意義を解明した。第九章は総括と今後の研究展望で、最後に補論一章を付して日台プロレタリア文学史を概観した。

本論文の主な成果は次の通りである。

(1) 楊逵、沼川定雄、入田春彦らの遺族、関係者多数にインタビュー、手紙による調査を行い、教員と警官という二人の日本人が楊逵文学形成に重大な影響を与えた状況を具体的に詳細に描き出した。

(2) 楊逵の東京体験、特に東京再遊体験、さらには東京文壇との関係を綿密に調査して、楊逵と東京文壇との関わりを十分に明らかにした。

(3) 楊逵を中心として台湾プロレタリア文学の誕生から衰退までを解明した。

本論文は楊逵の主な文学運動の場であった台中の田中保男ら日本人文化人との関係にまでは論が及んでいない。また楊逵の作品を巡る分析が欠乏しており、日台プロレタリア文学の歴史とその影響関係の検証が十分になされてはいない。しかしこれまでの楊逵研究がややもすれば日本帝国主義の圧迫に対する抵抗という些か単純な図式に傾いていたのに対し、植民地支配の根幹を支えていた教師と警察官という帝国の先兵が台湾人プロレタリア作家の出現を助けたという点を明らかにし、帝国主義支配下における台湾ナショナリズムの萌芽という弁証法的ダイナミズムを指摘した点を中心に顕著な成果をあげており、その内容は博士(文学)論文として十分な水準に達しているとの結論を得た。

特に 1937 年に肺結核罹患と極度の困窮の中、20 円の借金のために米屋から裁判所に訴えられた楊逵に月給二か月分相当の 100 円を与えて彼の危機を救った警察官入田春彦が実は政治的転向者であり、翌年入田の自殺後に無二の親友たる楊逵に残された蔵書の中の改造社版『大魯迅全集』全 7 巻が楊逵を魯迅文学受容へと導いたという指摘には、深い感慨を禁じ得ない。